

『〈ヤミ市〉文化論』書評——眩しい都市

川崎賢子

〈闇市〉ではなくてあえて〈ヤミ市〉。

本書はそう名指した理由について「たんに公定価格に違反してものの取引を行うという否定的な意味の「闇市」ではなく、公権力によって発動される秩序や統制を拒絶し、雑多で混沌としたものの中から、自らの知恵と工夫によって生き延びようとする人々のエネルギーが溢れたもの」（井川充雄「はじめに」と考えるからと述べている。「自らの知恵を工夫によって生き延びようとする」生への意志は、戦時下の総動員体制に封じられたものでもあった。〈ヤミ市〉に、わたしたちがある種の開放感を抱くのは、そこがつねに何かが始まろうとする場所であるからだろう。

本書巻頭のシンポジウムは「戦後池袋の検証 ヤミ市か

ら自由文化都市へ」と題されている。これが非常に内容の濃い、示唆に富む議論である。

〈ヤミ市〉という時空のありかを、パネラーのひとり吉見俊哉氏は「貫戦期の狭間としての闇（ヤミ）市」と題して語る。「戦中期と冷戦期を連続的なものとして捉えよう」とするのが「貫戦期」の視点である。「貫戦期」という枠組みはアンドルー・ゴードンが提案した。〈ヤミ市〉の貫戦期における連続性を浮かび上がらせる要素として、吉見氏は戦争末期の庶民生活に広がっていた敗戦の予感、経済統制の破綻と闇物資の流通をあげる。川本三郎氏は〈ヤミ市〉を準備する条件として、空襲時に駅周辺の建物をすべて強制的に破壊したいいわゆる建物疎開によって出来上がった空き地について言及した。〈ヤミ市〉の土台となる廃墟は、米軍

の空襲とそれを迎える日本軍の戦略によって、つくり出されたということになる。マイク・モラスキー氏は「終戦直後だけでなく、戦争中、および戦争末期にはこうしたヤミ経済に必然的に頼っていたという事実」を踏まえ、「市場（いちば）」と「市場（しじょう）」の両面性を備えている闇市に着目するならば、「戦中と戦後の境界線も曖昧になってきて、ある意味では無理に明確な歴史的境界線を引く必要がなくなる」と発言している。

ただし「貫戦期の狭間」としての〈ヤミ市〉の時空は、戦中期と冷戦期の間にあるエアポケットのような時期というよりは、アジア・太平洋戦争の敗者と勝者が入り混じり、冷戦期・ポストコロナル期の移民たちが入り込む、重層的かつ流動的なものだったろう。その意味では中村秀之論文「敗戦後日本のヘテロトピア―映画の中のヤミ市をめぐって」にいう「それ自身が現実の場所として、ヘテロトピアだった」「ヤミ市」というデッサンが有効であるに違いない。中村論文はミシェル・フーコーのヘテロトピア (heterotopie) 概念から「あらゆる場所と関係しながらそれらのすべてに対して他である場所」という定義、「普通は相容れず、相容れるはずもないような複数の空間を一つの場所に並置する」とか「開かれているように見えるが、既に

事情に通じた者だけが本当にそこに入ることのできる」といった規定、「最も本質的なもの」は「他のすべての空間への異議申し立て」である（ミシェル・フーコー、佐藤嘉幸訳『ユートピア的身体／ヘテロトピア』水声社、二〇一三年）といった言説を引用して、〈ヤミ市〉に通じると指摘する。焼け跡の地べたに敷かれた莫塵一枚からはじまって、小屋掛や屋台、バラックの集積する場にヒト・モノ・貨幣が集中し流通し交換される〈ヤミ市〉は、マイク・モラスキー氏の発言を借りるならストリート・カルチャーであり、ストリートに開かれ、内と外が反転しつつ晒される市場ではあるものの、見通しつくすことのできない「奥」があり、分別できない深い「闇」を内包しているということだろう。

〈ヤミ市〉文化における池袋という街の位置付けについても、本書によって考えさせられた。現在では新宿、渋谷と並ぶ東京山の手地区の三大副都心のひとつに数えられる池袋だが、ここに池袋駅が建設されたのは一九〇三年のことであり、新宿、渋谷と異なり、はじめから盛り場のターミナル駅と認知されていたわけではなかった。東上鉄道（現・東武東上本線）と武蔵野鉄道（現・西武池袋線）も当初は池袋駅を起点とする構想ではなかった。関東大震災後

の東京のモダン都市化や帝都としての機能整備の波と少しずれて、百貨店の建設や市電の乗り入れなどによって繁華街としての賑わいをみせるようになったものの、戦前の池袋を東京を代表する盛り場であったとみなすことはむづかしい。

西武百貨店、東武百貨店、パルコなどが開店する以前の池袋には都市文化などなかったという言説がある一方で、そんなことはない、と、本書は捉え直す。

池袋「駅」の西口と東口で街の成り立ちがずいぶんと異なる、むしろ分断されてそれぞれの発達を遂げてきたという点に、シンポジウム司会者の石川巧氏は注意を喚起する。「どちらかといえば西口は学園都市あるいは芸術家たちが集った側面」があり、「東口は墓地と巣鴨ブリズン」「よまごまなお寺」などがある。雑司が谷の墓地を中心として、周辺に立教、学習院、早稲田、日本女子大、お茶の水女子大学、そして講談社がある。街の隆盛と都市空間の質について「駅」中心に見る視点から解き放される必要があるとも教えられる。

敗戦直後、池袋の焼け跡からは焼け残った新宿伊勢丹や三越を臨むことができ、そしてその一帯、池袋では西口にも東口にも大規模な〈ヤミ市〉が形成されていた。「新宿、

渋谷、上野などの〈ヤミ市〉が地域整備などの目的で解体されるなか、池袋の場合は東京オリンピックのための都市再開発がはじまる一九六〇年代前半まで〈ヤミ市〉が残存した。そして今も、池袋の街には〈ヤミ市〉の「遺構」が奥深く根付いている（井川充雄）というからには、池袋の立教大学を拠点に〈ヤミ市〉文化の共同研究が立ち上げられたことの必然にも説得力がある。

都市研究、文学研究、映画研究、メディア研究など、いずれの視点をとっても〈ヤミ市〉文化研究の水脈の深さと豊かさに触れることができる。

GHQの検閲マニュアルであるキーログにはヤミ経済についての言説と表象をチェックすべきことが指示されているが、ひとびとは〈ヤミ市〉の活力を言葉にせずにはいらなかった。敗戦とGHQ占領とを抱きしめて、つまりは戦争状態は位相を転じつつ連続していたにもかかわらず、〈ヤミ市〉の喧騒と生の肯定のなかで、戦時下の統制と総動員の時代には許されなかった表現が生まれていた。戦後文学はカストリ文化的なるものからみずから差異化し自立しようとしたが、それは文学の思想を鍛えたのか、あるいは脆弱なものにしたのか。にわかには断じることができない。いずれにしても、後からやってきた読者たちが戦後文

学の表象と思想を読みなおすためには、占領も、検閲も、〈ヤミ市〉文化、カストリ文化をも、もう一度視野に入れなければならぬだろう。

文学研究者としての筆者は、〈ヤミ市〉文化研究によつて、占領期文学という概念にたしかかな手応え、手触りをおぼえ、また、アジア・太平洋戦争から冷戦期に至る時期を「貫戦期」として連続的に捉え直す史的構想の有効性についても思いを新たにしたい。戦後文学という枠組みは、ともすれば一九四五年八月十五日で日本の戦争は終わったという幻想を補強し、戦争の記憶の風化に回収されがちだった。高度経済成長期の日本文学についても、戦争状態にくみこまれた冷戦期の文学として、国際関係の力学のなかに置いて読みなおされなければならぬ。

そうしてみると、アジア・太平洋戦争末期に敗北による統制のほころびのうちに芽生えた〈ヤミ市〉文化が、どこにたどり着いたのかについても、再考の必要があるだろう。占領期から一九七〇年代初頭までの映画を論じた中村論文は、映画における〈ヤミ市〉表象における「絶望と暴力」、あるいは〈ヤミ市〉と解放感との結びつきが錯覚であったことを悟るといふ物語の言説とを示して表象の歴史におけるこの事実をどう捉えるべきだろうか、と、読者に

問いかける。〈ヤミ市〉文化の表象と記憶は戦争が遠ざかるにつれて遠いものになったのか。〈ヤミ市〉的経済は高度経済成長に回収されたのか。〈ヤミ市〉的都市空間を一九六四年の東京オリンピックに向けた都市計画と国際化が切断したのか。

シンポジウムのパネラーたちはそれぞれ異口同音に、〈ヤミ市〉的なものがなくなることはない、どのような都市のシステムのもとであれ生まれるものだと言っている。現在でも世界各地に〈ヤミ市〉的なものをかかえつつ、あるいは経済成長とともに〈ヤミ市〉的なものを活発化させている国がある。独裁政治のもとでいともなまれている〈ヤミ市〉もある。すっかり飼いならされて〈ヤミ市〉文化の活力を失った社会や、〈ヤミ市〉的な「絶望と暴力」を庶民から奪つてわがものにする国家権力などというものもある。〈ヤミ市〉が遠く眩しく見えるわたしたちの現在はどこにあるのだろうか。

【注】

(井川充雄・石川巧・中村秀之『ヤミ市』文化論)二〇一七年三月二十二日 ひつじ書房 三三六頁 税込三、〇二四円)

(立教大学文学部特任教授)